

中学校英語へつなげるために小学校外国語活動のできること — 円滑な接続のための取り組み —

齋藤 彩乃

はじめに

小学生の時 ALT の先生が行う英語の時間がとても好きだった。歌を歌ったり、ゲームをしたり、劇をしたりと英語を使った活動はとても楽しかった。その授業で使われていた教材や教具は、絵がたくさん描いてあったり、様々な色が使われカラフルであったりして、強く引き込まれた記憶がある。その頃から英語というものに興味を抱き、好きになっていった。そして中学生になり、小学校よりさらに発展した英語（書くこと・読むこと・話すこと・聞くこと）を実践する授業を通して、より英語の楽しさを感じ、英語を学んでいくことができた。小学校での外国語活動の楽しさが中学校での英語の楽しさにつながり、英語学習を楽しく感じるのに役立ったのだと思われる。そのつながりが、私の英語が得意となった理由である。その一方、周りでは中学生になって英語を苦手とする人がとても増えた。その理由として考えられるのは、中学生になり小学校で培ったものが活かしきれず、急に講義型の英語学習になったことと、さらに学ぶ内容が膨大になり、細かい部分まで学ぶ範囲が広がったからではないのかと考える。

そこでまず、小学校での外国語活動で興味・関心や楽しさをもたせるためにはどのような授業づくりを行えばいいのか、また、小学校外国語活動で学んだことをどのように活かして中学校英語へつなげればいいのか、どのようにすればそのつながりがスムーズに行えるのかという、小・中のつながりの部分に疑問をもった。

そこで、本論文では小学校で取り組まれている外国語活動に重点をおきながら、中学校英語に円滑につなげるための工夫について研究する。

まず第 1 章では、どうして英語が小学校段階から必要とされ、導入されることになったのかについて、国の動きをみながら導入までの経緯を調べる。あわせて小学校・中学校とそれぞれの学習指導要領を分析し、比較していく。

次に第 2 章では、学習指導要領を踏まえた、現在の教育現場における外国語活動の取り組みをみていく。ALT の活用や教材・教具の活用の仕方、具体的な活動内容を調べ、発達段階に応じた英語とのかかわり方についてみていく。

そして第 3 章では、小学校外国語活動から中学校英語への円滑な接続を目指し、小学校高学年における授業実践に向けた小学校外国語活動指導案作成に取り組む。ここでは、「円滑な接続」「身近に感じる英語」「楽しい実践」をキーワードに作成していく。

最後に第 4 章においては、これからの小学校外国語活動について、第 1～3 章の研究結果から中学校英語との円滑な接続をはかるために、小学校段階のできること（学習や活動方法）を考えていく。子どもたちが外国語を身近に感じるようになるためにできることをまとめていく。

以上を通して、これからの小学校における外国語活動の在り方と、中学校英語への円滑な接続

の仕方を考えてきたい。また今回の研究を通して、自分が小学校教員として子どもたちが外国語に少しでも興味・関心を抱くような取り組みを見つけていきたい。それと同時に、外国語を学ぶ楽しさを子どもたちに伝えられるような実践や取り組みも見つけ、今後に生かしていきたい。

第1章 小学校外国語活動の導入の経緯と中学校英語の学習指導要領との比較・分析

第1節 小学校外国語活動導入までの国の動き

小学校における外国語学習は、世界の国々を見ても多くの国で実施されている⁽¹⁾。そういったまわりの国の動きにも敏感になり、現在では日本でも小学校高学年から外国語活動が導入され、外国語学習が開始されている。新聞やニュースにおいては、「日本人は、英語はできても、話せない」というような印象をもたれていることが多いと話題になっていたことがあった。そのようなことから、特に小・中・高と長い時間をかけ継続して、積極的なコミュニケーション能力の育成に力をいれている。2020年には、東京開催のオリンピック・パラリンピックも行われる予定になっており、今よりもさらにたくさんの外国人が日本に来るようになり、様々な言語を耳にするようになる。急速にグローバル化していく社会の流れについていくためにも、これからは英語を聞き取ることができ、話すことができるということが必須な社会になっていくのではないのかと考える。そのような能力を身に付けるために、中学校から外国語学習が開始されていたが、開始段階を早め、小学校低学年から外国語に触れさせる機会を設けるといように、低学年化の傾向がある。

こうした中、小学校外国語活動が導入されるまでの国の動きを、資料を基に以下のようにまとめた⁽²⁾。

表1：小学校外国語活動が導入されるまでの国の動き

年	事項
1986	臨時教育審議会答申：小学校への英語教育の導入について検討を提言
1992	小学校2校・中学校1校を研究開発校に指定 テーマ「英語学習を含む国際理解教育」
1996	地域の学校の実態に応じて、国際理解教育の一環として、「総合的な学習の時間」や特別活動の時間等において外国語会話等の導入を答申
1998	学習指導要領告示（2000年度から施行）「総合的な学習の時間」の国際理解における外国語学習に関わる内容：児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりする等の、小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにする。
2006	第16期中央教育審議会外国語専門部会審議のまとめとして、3つの観点から小学校英語教育の充実を提言 また、小学校英語活動は、英語を用いて、言語や文化に対する理解、積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度、国際理解を深めることを目標とすることを提言
2008	第16期中央教育審議会答申は上記の外国語専門部門の提言を踏まえ、以下の答申をした。 ①外国語活動を第5・6学年で必修とするが、教科とせず、領域として位置付ける ②年間35単位、週1コマとする ③総合的な学習の時間の場合と異なり、国として外国語活動の目標や内容を示す ④教科のような数値的な評価はしない ⑤外国語は原則として英語 学習指導要領告示（2011年度から施行）
2009	共通教材「英語ノート」発行、配布
2011	共通教材 Hi, friend!（「英語ノート」の改訂版）の発行、配布

この表において、特に注目すべきことが3点ある。まず1点目は、2006年の第16期中央教育審議会外国語専門部会審議のまとめとしてあげられた小学校英語教育の充実の提言である。その提言の内容は次の3点である⁽³⁾。1つ目は、小学生の柔軟な適応力を生かすことによる英語力の向上である。それは、小学生の柔軟な適応力は、コミュニケーションへの積極的な態度の育成や、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことに適しており、コミュニケーション能力を育成する上で重要なものと考えられるものである。2つ目は、グローバル化の急速な進展への対応である。それは、小学校での外国語教育は、グローバル化が進展する中でその必要性が高まっている。小学校での外国語活動を充実することにより、次世代を担う子どもたちに国際的視野を持ったコミュニケーション能力を育成する必要があると考えられるものである。3つ目は、教育の機会均等の確保である。それは、総合的な学習の時間などの英語活動では活動内容や授業時数にばらつきがある。教育の機会均等々の化確保をするという観点、特に中学校教育との円滑な接続を図るという観点から、中学校に入学したときに共通の基盤が持てるよう、小学校段階で必要な指導内容を提供する必要がある。

注目すべき2点目は、第16期中央教育審議会答申は上記の外国語専門部門の提言にある「⑤外国語は原則として英語」という点である。なぜ様々な外国語があるなかで原則として英語なのかという理由である。それは、中央教育審議会答申(2008年)において「アジア圏においても国際共通語として英語が使われていることなど、国際的な汎用性の高さを踏まえれば、中学校における外国語は英語を履修することが原則とされていると同様、小学校における外国語活動においても、英語活動を原則とすることが適当と考えられる。」との理由を示している⁽⁴⁾。ここで、諸外国における小学校外国語教育の実施状況についてもみている。日本の近隣国では、2000年前後から外国語教育として小学校低学年から外国語学習として英語の導入がされている。指導目標をみると、どの国にも共通してみられる言葉は「コミュニケーション能力の育成」である。その他の目標としてあげられているものは、各国によって異なっているが、言葉や言い方が異なっているだけであって、類似している点が多い。実施時間や指導者についてはそれぞれの国のカリキュラムや、独自のやり方で取り組まれている。

そして3点目は、2008年の現行学習指導要領告示(2011年度から施行)である⁽⁵⁾。「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」は、以下の3点を柱として、統合的に体験することで、コミュニケーションの素地を養うことができるとしている。

- ①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めること
- ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること
- ③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること

①の指導上のポイントとしては、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に対する興味・関心を高めたり、これらを尊重する態度を身につけさせる。またこれからは国語に関する能力の向上に資することである。②の指導上のポイントとしては、コミュニケーションを図る上でジェスチャーなどの非言語的な手段も大切であるので、さまざまなコミュニケーションの方法を指導することである。③の指導上のポイントとしては、体験的に「聞くこと」「話す

こと」と通して、音声や表現に慣れ親しませることである。

第2節 小学校と中学校の外国語教育における学習指導要領の比較と分析

小学校と中学校において、それぞれ外国語教育がどのような目標で行われているのかみていく。平成20年の学習指導要領における小学校外国語活動、ならびに中学校英語の目標は、以下のとおりである。

〈小学校外国語活動〉

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

〈中学校英語〉

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

小学校段階においては、言語や文化について体験的なことから外国語の理解を図っていくことが重視されている。体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、音声や表現に慣れ親しませていく。その中で、積極的なコミュニケーション能力を育成していくことができる。積極的なコミュニケーション能力とは、相手の話を注意深く聞いたり、相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さ、伝えたいことが伝わりお互いのコミュニケーションが成立したときの嬉しさを実感しながら積極的に思いを伝えようとしていく能力であると考えられる。その能力を身に付けていく中で、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度も育成されていく。そして、積極的なコミュニケーションを図るうえで、ジェスチャーなど非言語的な手段も大切であり、他にもあるさまざまなコミュニケーションの方法を指導していくことが必要である。同時に、コミュニケーションをしていく中でことばの大切さや豊かさ気付かせ、言語に対する興味・関心を高めていく。また、それらを尊重する態度を身に付け、国語に関する能力の向上にもつなげていく。これらのことは、国語に関する能力の向上にもつながっていく。文化理解に関しては、地域の名産物や地域の特徴などを外国語で発信していくといった活動の中で、理解を深めていくことができる。

中学校段階においては、国語の領域のように、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」という4つ領域のバランスをとりながら学習を進めていることがわかる。小学校で培った「聞くこと」「話すこと」をメインとした音声面によるコミュニケーション能力の一定の素地が育成されていることに加えて、「読むこと」「書くこと」の指導の充実を図っていく。そして、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」は小学校段階から継続して中学校の目標にもあげられている。積極的なコミュニケーションで4つの領域をバランスよく指導していく、その後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培っていく。

小学校・中学校それぞれの目標を比べると、共通している点は、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」である。この目標は、小学校・中学校にとどまらず、高等学校の外国語科の目標にもあげられている。そのことから、「積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」は義務教育を超えて、時間をかけて行われていくものであることがわかる。その中で、小学校では体験的なことから理解を深めていくことに重点がおかれていることがわかる。体を動かしながら英語の歌を歌ったり、ゲームをしったりしていく中で英語の音声や表現を耳にし、音声面を中心に慣れ親しんでいく。一方、中学校では、小学校で培った音声中心の学習を基盤に英語を読んだり、書いたりという活動が加わっていき、外国語活動の充実がさらに図られていく。そして、小学校とは異なり「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4つの領域のバランスを図りながら外国語学習を進めていく。

以上の小学校・中学校による学習指導要領の目標を分析し、比較したことからわかった共通点と相違点を資料を基に以下のように表にまとめた⁽⁶⁾。

表2：小学校・中学校による学習指導要領の目標分析

	小学校	中学校
言語や文化の理解	体験的に理解を深める	理解を深める
コミュニケーションの態度	積極的な態度を育成	積極的な態度の育成
コミュニケーション能力	素地を養う	基礎を養う

第3節 中学校英語との接続

次期学習指導要領では、小学校高学年では英語が教科化され、中学年に外国語活動が新たに設定される。小学校の外国語活動においては、「聞くこと」「話すこと」の音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成される。そのことに加え、中学校の英語においては、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した小学校段階で学んだことの発展的な学習や言語活動に取り組ませ、小・中の接続の連携を促している。しかし、現状は小学校と中学校においての外国語学習についての意識の違いや日常の多忙さ等の理由もあり、連携が円滑に進んでいないのではないかと考えられる。小学校で学んだことを中学校でも再度学ぶといったように、学習内容を繰り返すケースも少なくない。小学校の外国語活動で培ったコミュニケーション能力の素地を活かきることができていないのではないのかという疑問が出てくる。そこで、小学校で学んだものがどのようなレベルのものなのか、中学校の外国語学習指導を始める前にチェックすることが必要となる。小学校段階までの外国語の素地として、小学校においての外国語との触れ合いの内容やレベル等の観点で、文部科学省は例として以下のようなものがチェックする項目としてあげている⁽⁷⁾。

- ・語彙はどんなものに触れてきたのか
- ・どんなものが言えるようになってきているのか
- ・発音はどの程度のものか
- ・決まり文句はどの程度覚えているのか
- ・文字に触れてきた子どもはどのくらいいるのか

・英語嫌いはいないのか

これらのチェックを行うことで、子どもたちが小学校でどのようなものを身につけたのかを明確にすることができる。そうすることで、中学校入学段階での子どもたちの外国語学習への取り組みを知ることができ、子どもたちのレベルに合わせた外国語学習に取り組みさせていくことができる。併せて小学校外国語学習で学んだこととの繰り返し学習を防ぐことができ、小学校で培ったものを踏まえ、さらに外国語学習の発展と充実を図っていくことができる。

第2章 現在の教育現場

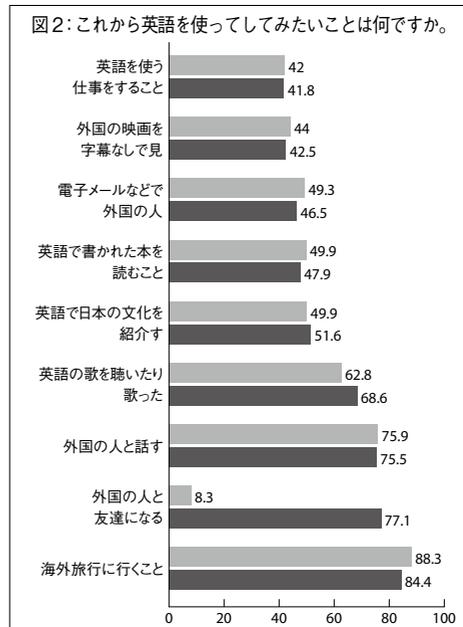
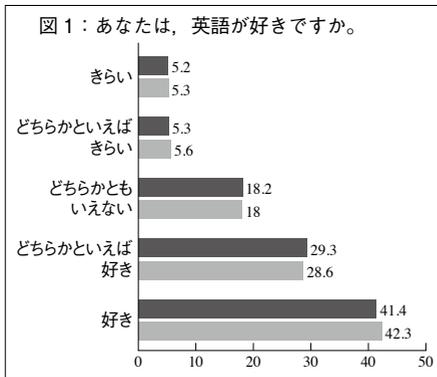
本章では、小学校外国語活動の取り組み方について様々な視点から調査したものの結果をもとに、現在の教育現場における外国語活動への取り組みをみていく⁽⁸⁾。

第1節 子ども達の現状について

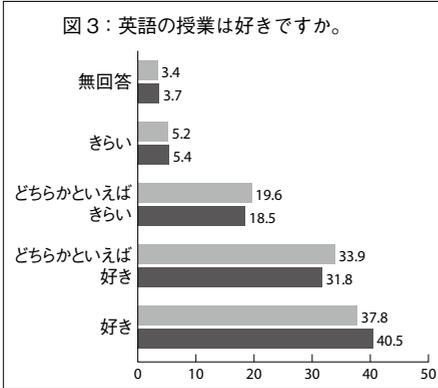
外国語学習に取り組んでいる子ども達が、どの程度英語を身近に感じているのか、英語や外国語活動に対する学習の意識について結果を分析していく。ここでは、小学校5・6年生を対象として行われた平成23年度・平成26年度小学校外国語活動実施調査結果を比較しながらみていく。(青帯→23年度 赤帯→26年度)

◎児童の英語に対する意識

〈英語に対する意識〉



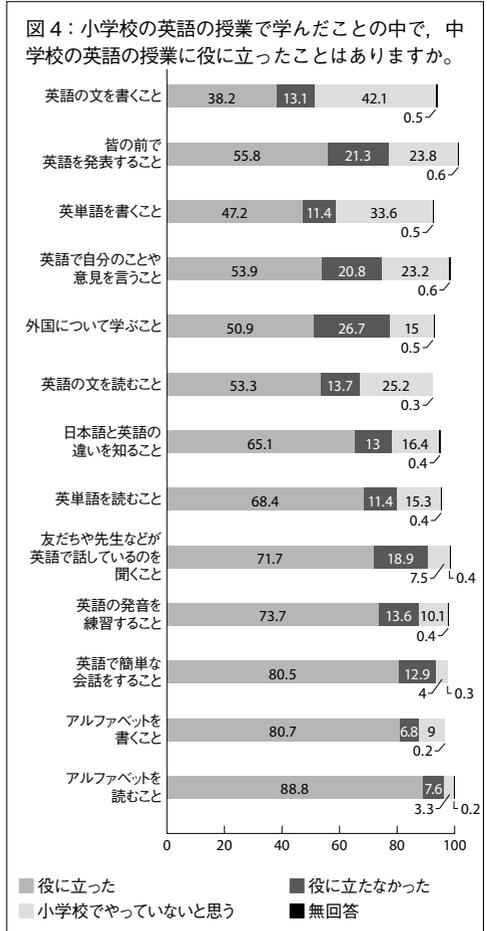
〈英語の準備に対する意識〉



(以上の図1～4は、文部科学省『平成26年度小学校外国語活動実施調査結果』より引用)

以上の結果から、子ども達の中で英語に対する意識は徐々に高くなっていくことがわかる。授業の理解についての状況の調査項目の「あなたは、英語の授業の内容を理解していると思いますか。」という質問に対して、23年度と26年度の結果を比べてみると、27.7から34.0に増えている。外国語活動が子ども達の中で定着し、英語が徐々に子ども達の身近な言語となってきていると考えられる。さらに細かく結果を分析していくと、「もし、あなたに外国の人が話しかけてきたら、あなたはどのようにしますか。」という質問に対して「英語で受け答えをする」と答えた児童が増え、「日本語で受け答えをする」と答えた児童が減った。このことから、児童の中で、外国の人に話しかけられたときに英語を使おうとしていることが読み取れる。この結果は、子ども達が生活している環境の中に以前より外国の人が多くなり、外国の人と触れる機会が多くなり、英語を耳にする機会も増加していることも結果の理由につながっていると考えられる。英語に慣れ親しんでいっている傾向にある子ども達は「これから英語を使ってみたくは何ですか。」という質問に対して、答えの項目の中で、平成23年度の結果から平成26年度の結果において、1番増加した項目が「英語の歌を聴いたり歌ったりすること」であった。これは、たくさんの外国のアーティストが来日してコンサートを行ったり、テレビの歌番組で放送されていたり、インターネットを通じて閲覧・試聴することができる機会がたくさ

〈外国語学習での学習が中学校で役立ったか(中1)〉



ん身近にあるからである。洋楽鑑賞を楽しむという点から、英語独特のリズムや音楽に興味・関心が向いてきている。同時に、日本人とは違った感じ方を表現している歌を通して、文化の違いも自然と理解していくことができる。こうして外国語に触れる機会が様々な形で子どもたちの身のまわりに増加していることは、子ども達が英語に興味・関心をもち、身近に感じることができるようになって来ている理由であると考えられる。

しかし、ほとんどの答えが増加傾向にある中、授業での取組状況の「あなたは、英語の授業において次のことができていますか。」という質問に対して、「学級担任の先生や英語の先生に、自分から英語で話しかけること」の項目に課題がみられる。子ども達は英語を理解しようという前向きな気持ちでおり、英語を使おうとしているが、自分から英語を活用して話しかけることがまだできない子どもが多い傾向にあるという点に課題がある。子ども達の中で、誰とでも英語で積極的にコミュニケーションを図っていく点にもっと自信をつけさせられるような外国語活動にしていく必要がある。そのためには、子ども達がさまざまな人と英語で関われるような言語活動を授業に積極的に取り入れ、コミュニケーション能力を養っていくことが大切である。

第2節 ALTの活用状況

ALTの活用が多くみられるようになったきっかけは、平成18年度の外国語専門部会において、教育条件整備の1つとしてティームティーチングで指導にあたっていくことが基本となったことである。その際に、1987年から開始されたJETプログラム(The Exchange and Teaching) 語学指導等を行う外国青年招致事業が「内なる国際化」の進展に寄与するかたちで現在の指導体制となっているのである。ペアを組んで指導にあたることで、より充実した外国語学習にしていけることができると考える。それでは、一体どれだけのALTが指導にあたっていいのかをみていく。

表3：ALTの活用人数の状況

	小学校におけるALTの活用人数	合計に占める割合
JETプログラムによるALTの人数	2,040	20.1%
自治体が独自に直接雇用しているALTの人数	1,683	16.6%
派遣契約によるALTの人数	1,033	10.2%
請負契約によるALTの人数	1,607	15.8%
その他のALT等の人数	3,800	37.4%
合計人数	10,163	

表3にみられる結果から、小学校における外国語活動等の授業で、外国語指導助手(ALT等)を活用している時数の割合は大きく増加しているわけではないが、徐々に増加していきつつあることがわかる。同時に、ALTをはじめとする英語に堪能な人材や中・高英語教員の活用による外国語活動等の時間数も増えていることもわかる。より専門的な人材を教育現場で活用することで、教わる側の子ども達もネイティブに近い英語を耳にする機会が多くなる。そういった多様な人材の活用により子ども達の外国語学習をさらに深く広げていくことができると考える。

第3節 ICTの活用状況

今や多くの教育現場において、どの教科でも ICT 機器や ICT 教材を活用した授業を多く目にするようになった。平成 18 年度外国語専門部会において、外国語活動の中で積極的に ICT 機器を活用するようという指示がでた。その頃から、少しずつではあるが ICT 機器を活用した外国語活動が増えていったと考える。現在の教育現場において、数多くある ICT 機器の中でも、どのようなものが有効的に活用されているのかという視点・ICT 機器を活用することで、子ども達にどのようなメリットがあるのかという 2 つの視点から結果を分析していく。そして、その ICT 機器活用によって今までとは異なる部分にも注目していく。

表 4：活用した ICT 機器（複数回答可・表内左が実数、右が割合）

パソコン		電子黒板		書画カメラ (実物投影機)		デジタルカメラ		指導者用タブレット	
15,585	87.0%	9,258	51.7%	4,223	23.6%	3,166	17.7%	1,309	7.3%
デジタルビデオ カメラ		TV 会議システム		児童用タブレット		その他			
1,239	6.9%	91	0.5%	270	1.5%	3,347	18.7%		

外国語活動等において ICT 機器を活用した学校の割合は、平成 25 年度は 88.7% であった。その ICT 機器を活用した学校のうち表 4 にまとめたように、87.0% がパソコン、51.7% の学校が電子黒板を活用していたことがわかった。ICT 機器を活用することで、子どもたちはいつもとは異なる授業スタイルにおおきな興味・関心を持ち、意欲的に学習に向かうことができる。そして、映像によって、文字や絵を視覚的に捉えやすくなるため、理解度を深め、習熟度を高めることができる。また、ICT 機器の中でもパソコンを活用することで、子どもたち一人ひとりの理解度や習熟度を細かく分析し、確認することもできる。

ICT 機器を活用していくうえで、ICT 機器の活用方法を熟知し、どのような目的で活用していくかを明確化し、効果的に活用していくことが今後の重要な課題となっていく。

第4節 教材や教具活用における選択と留意点

教材・教具を選択していく中で一番重要なことは、第 1 章でもあげたように小学校外国語活動学習指導要領でいわれている目標を達成することである。そのために、第 1 章でとりあげた小学校学習指導要領解説外国語活動編の 3 つの柱の視点から教材・教具をどのように活用していくことが目標達成につながるのかという観点でみていく。

はじめに「言語や文化について体験的に理解を深める」という点である。ここでは、教材・教具が言語や文化の違いをどのようにして学習者に気付かせるのかという点に十分な配慮が必要である。子どもたちの興味の中から自然な形で自国と外国の文化の違いに気付かせていきたい。そして、コミュニケーションを中心とした活動につなげていく。この視点において題材としてあげられるのは、世界の朝食・お正月の料理・民族衣装等である。それらの題材のものを実物で見せたり、写真や絵、カードとして提示したりする。その際には、文化において人権に関する部分もあるため配慮が必要である。今や、学級の中にも多国籍化が進んでおり、様々な

文化で溢れている。そこで、自分の国とは異なる文化に触れたとき、子どもは感じたり考えたりしたことを口に出し発言すると予測される。その際には、子ども達の発言の中に耳を傾け、その発言の対応の仕方にも注意が必要である。そして、教師自身も子ども達に偏見をもたせるような言動には気をつけ、子ども達とともに様々な文化に触れていきたい。

次に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」である。他者と英語を話したり、聞いたり積極的にコミュニケーションを図っていくためには、どのような教材・教具の活用、そして学習活動があるのか。児童の興味・関心の高い教材や、児童の発達段階やレベルに合わせた教材を活用していく。多く活用されているのが、インタビュー活動である。疑問文を全体で練習した後に、友達や ALT・学級担任に質問し、その答えを多く書いた人＝たくさん質問した人がチャンピオンとなるような活動である。このような活動は、子どもたちの意欲を惹きつけることができる。子どもが主体的に他者と関わりをもつことができ、積極的なコミュニケーションを図るための能力を育成していくことができる。

最後に「音声や基本的な表現に慣れ親しませる」である。この視点においては、音声教材が主であり、基本的な表現を繰り返し練習し習得させるために、絵カードや ICT の活用も考えられる。そこで留意しなければならない点がある。それは、児童の発達段階にあっているのかという点と、外国語活動にふさわしいものなのかという 2 点である。1 点目の児童の発達段階にあっているのかという点については、次節で詳しく述べる。2 点目の外国語活動にふさわしいのかという点については、楽しみながら外国語に取り組みせていく少人数（グループ単位や隣同士のペア）によるカードゲームやビンゴゲームやカルタのようなゲームを取り入れた活動がある。そのような活動を行う際に、子どもたちは速さや勝負だけにこだわりをもってしまう傾向がある。そこで、そのようなことを防ぐためにも ALT や学級担任が読み上げ、全体を巻き込んでいく活動として取り組みせていく工夫が必要となってくる。読み上げるといのは、カルタのように何かお題があり、そのお題に沿って進んでいくようなゲームを行う際に、子ども達にゲームのすべてをやらせてしまうと、「英語」を意識したゲームにはなかなかならない。そこで、ALT や担任がお題を読みあげることで「英語」を聞きとるといったような意識をさせ、活動に向かわせることができる。

以上、三つの視点から教材や教具活用の選択と留意点をみてきたが、教材や教具を活用するにあたって、使用目的の明確化や使用教材そのものの理解ができていなければ、子どもたちの学びの中で有効に活用することはできないと考える。気付きを促すものなのか、コミュニケーションを積極的に図らせるのかといったように、使用目的を十分理解した上で使用していく。そして、どの教材や教具を活用した授業の後にも、自己振り返りシートのようなもので、子ども達にとってその時間の活動を振り返らせることが必要であると考え。その時間の中で子ども達がどのようなことが理解でき、どのようなことが理解できなかったのか、そして、どのレベルまで達したのか、といったような指導の分析を行う。そうすることで、子ども達は前よりもできるようになったことに達成感や充実感を感じることができる。教育現場では、どの教科でも「指導と評価の一体化」が叫ばれているように、教員側でも指導の分析をすることで子

もの思いや学びの習熟度を知ることができ、指導方法の改善に生かしていくことができる。そうすることで、次の指導をより充実したものにしていけることができ、その積み重ねをしていくことで小学校での外国語学習の素地をしっかりと養っていくことができる。このように自己振り返りシートを毎時間取り組ませることで、子ども達と教員側とでさらに質の高い外国語学習を行っていくことができる。

第5節 発達段階に応じた英語との関わり方

外国語活動といってもたくさんの活動方法がある。しかし、発達段階によってことばの学習方法や獲得の仕方が異なるため、それぞれの発達段階に応じた活動方法を選択していかなければならない。そこで、小学校での発達段階において、どのような特徴があるのかを発達心理学と関連させながらみていく。小学校の発達段階においては、低・中学年は具体的操作期にあたり「数や量の保存概念が成立し、事物そのものを使った思考活動が可能。可逆性を獲得し、論理的思考も行うことができる。」とされている⁽⁹⁾。音やリズムに合わせて、からだを動かしたりしながら体験を通して学習を習得していく。五感を用いた活動が有効的な年齢である。そして、何度も繰り返し取り組ませることで、理解をさらに深めていくことができると考える。そして、高学年は具体的操作期から形式的・抽象的操作期へと変わって「形式的、抽象的操作が可能になり、仮説演繹の思考ができるようになる。」年齢であるとされている⁽¹⁰⁾。低・中学年とは異なり、他教科の学習内容と関連付けることができるようになる。単数や複数形、語順を意識させることでより認知的・分析的な活動につなげていくこともできる。

小学校でのそれぞれの発達段階の学年年齢に応じた学習・活動内容を選択していくことで、学習者となる子どもたちの外国語への興味・関心や習得の充実を図っていくことができると考える。また、ペア学習やグループ学習を取り入れていくことで、協同的な学びにもつなげていくことができる。そして、中学校・高校と進んでいくにつれて、文法能力や談話能力などのコミュニケーション能力を総合的に身に付けていくことができる。

そして、小学校学習指導要領には小学校2年間を通じて学習を進めていく上での配慮点があげられている。その中でも、学習と発達段階の関連しているものに注目してみていく。1点目は、「ア 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。」である。ここでの身近なコミュニケーションの場面として考えられるのは、挨拶・自己紹介・買い物・食事・道案内等である。このような身近な場面から外国語でのコミュニケーションを体験させることで、子どもたちはイメージがもちやすく、取り組みやすくなる。そして、そのような場面において使われる外国語は定型文であることが多い。そのため、繰り返しの中で言葉の発音方法や意味の理解を深めていくことができる。2点目は、「イ 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取り扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。」である。ここで注目したいのは、児童の学習負担の配慮という部分である。い

つも話したり、聞いたりしない言葉を学んでいくということは容易なことではないと考える。そこで、子どもたちの学習状況を観察しながら外国語学習を進めていくことが必要であると考える。

配慮点としてあげられている以上2つの共通点は、コミュニケーションを活用する点である。そこでコミュニケーションの働きの内容として考えられるのは、相手との関係を円滑にすることや、自分の気持ちや事実、考えや意図を伝えることであると考えられる。コミュニケーションとは、言葉の意味を伝え、気持ちを運び、人とつながる道具である。そして、外国語では国を越えて、つながることができる大きな手段の1つにもなっていく。生きたコミュニケーションによって、外国語を学んでいくことの他にも他者との結びつきを可能にし、豊かにしていくことにも大きくつながっていく。コミュニケーション能力を重視することには、様々な意図が含まれており、相手を含めた周りについての新たな発見がうまれるものである。

加えて、学習指導要領では、小学校2年間を通じての学習の配慮点をさらに細分化した各学年に応じた配慮点もあげられている。第5学年における活動の配慮点は、「外国語を初めて学習することに配慮し、児童に身近で基本的な表現を使いながら、外国語に慣れ親しむ活動や児童の日常生活や学校生活にかかわる活動を中心に、友達とのかかわりを大切に体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること。」である。そして、第6学年における活動の配慮点は、「第5学年の学習を基盤として、友達とのかかわりを大切にしながら、児童の日常生活や学校生活に加え、国際理解にかかわる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること。」である。

第3章 授業実践に向けて

本章では、第1・2章と研究してきたものを活かし、現場実践に向けてキーワードに沿った指導案作成を行っていく。その中で、発達段階やそれに応じた教材や教具の選択、活動内容である指導方法を選択していく。キーワードとしては、3点「円滑な接続」「身近に感じる英語」「楽しい実践」である。なぜこの3点にしたのかというと、1点目の「円滑な接続」については、この研究で最も重要なものとして取り上げているからである。特に、小学校から中学校にかけての外国語活動の円滑な接続について意識し、指導案の作成にあたっていきたい。2点目の「身近に感じる英語」は、小学校外国語学習指導要領にもあげられていたように、子ども達の身近にあるものから英語に触れさせていく。そうすることで、英語を身近な物事と関連させながら外国語というものに慣れ親しませていくことができる。3点目の「楽しい実践」は、私自身の経験から小学生の時に歌やダンス、ゲーム等の楽しい活動を通して英語に関心をもち、英語が楽しいと思ったきっかけになったからである。以上の3点を関連させながら高学年の外国語活動指導案作成を行っていく。

第1節 学習指導案①「体の調子を伝えよう」

はじめに「身近に感じる英語」と「楽しい実践」を生かした授業について構想した。以下、

国立教育政策研究所の《外国語活動 事例2 「英語ノート2」 Lesson5 [本単元の狙い・目標・内容] を基に単元計画を設定した場合》と《外国語活動 事例4 「英語ノート」を活用せず、独自に単元計画を設定した場合》の2つの形式を参考に、指導案として試案を示した⁽¹¹⁾。

(1) 単元目標

- 1 英語で体の部位や体の調子を伝えることに興味をもつ。
- 2 積極的に体の部位や体の調子を伝えようとしている。
- 3 体の部位や症状の伝え方の表現に慣れ親しむ。

(2) 本単元の内容

- 1 主としてコミュニケーションに関すること
 - ・友達と英語で体の部位や体の調子を伝え合うことの楽しさを体験すること。
 - ・積極的に体の部位や自分の症状を相手に伝えることができる。
- 2 主として言語や文化に関すること
 - ・体の部位や体の調子を伝えることを通して、英語の音声やリズムに慣れ親しむこと。
 - ・症状によって体の調子の伝え方が違うことに気付くこと。
 - ・ALT や異文化を持つ人々との体の調子を伝え合うことを通して、文化に対する理解を深めること。

(3) 指導と評価の計画

外国語活動の評価規準は、3つの観点から成り立っている。

1. コミュニケーションへの関心・意欲・態度
2. 外国語への慣れ親しみ
3. 言語や文化に対する気付き

○指導計画（時間配分3時間）

時	目標・活動	評価（コ：上記1、慣：上記2、気：上記3）				
		コ	慣	気	評価規準	評価方法
1	体の部位の英語での言い方を知ることができる。 Let's Chant ♪ 「Head, shoulders, Knees and Toves」	○			・体の部位を積極的に言ったりしている。	・行動観察 ・振り返りシート分析
2	前回学んだ体の部位の英語での伝え方を活用して、体の調子を伝える表現に慣れ親しむ。 Let's Chant ♪ 「Head, shoulders, Knees and Toves」 Let's Play 体の調子ビンゴ			○	・英語と日本語で、体の調子や症状の表現の仕方が違うことに気付いている。	・行動観察 ・英語ノート点検 ・振り返りシート分析
3	薬屋さんに行って、体の調子に合わせた手当の仕方を伝えようとしている。 Let's Play ペアで体の調子を伝え合い、その調子に合わせた手当を伝える。 →（プチ劇をする）			○	・体の調子や症状について英語で聞いた言ったりしている。	・行動観察 ・振り返りシート分析

(4) 本時の指導 (3/3 時間)

①ねらい：子ども達の日常生活で関わりがある病気やけがの言い方に慣れる。

②指導過程

過程	学級担任・ALT の活動	・指導上の留意点 ◎評価規準 (評価の観点)
・挨拶をする。 Hello I'm good/fine/sleepy/hungry	・ALT が中心となり挨拶を行う。	・これから授業が始まることを意識させるように、指導者は元気に挨拶をする。
・前回の復習を行う (体の部位について) Let's Chant ♪ 「Head, shoulders, Knees and Tunes」をみんなでやる。	・担任が補助に入りながら前回の復習を行う。 ・ALT のあとに続いて、体の部位を英語で練習する。 ・前回やった歌をもう一度行う。	・前回覚えたことを再度思い出させ、前時と本時をつなげる。
学習課題：体の調子を英語で伝えよう。		
薬屋さんで売っている物の言い方を練習する。 thermometer (体温計) adhesive plaster (絆創膏) mask (マスク) ice pack (氷嚢) tissue paper (ティッシュ) medicine (薬)	・ALT の発音のあとに続き、薬屋さんで売っているものを英語で練習する。(意味も理解させる)	・理解していない子どもがいなか、発音がわからない子どもはいないか、机間指導を行う。
・ゲームの説明を行う。	<p>・ゲームの説明を行う。</p> <p>①子ども達は薬屋さんとお客さんのグループに分かれる。</p> <p>②お客さんになった子どもは病気やけがの症状を表したカードの中から4枚ずつ持ち、その手当てに必要なものを考えて薬屋さんをまわってくる。</p> <p>③薬屋さんの役の子どもは手当てに必要なもののカードを何種類か持っていて、お客さんに頼まれたら渡すようにする。</p> <p>P: Hello. May I help you? C: Yes, please. P: What's the matter? C: I have fever. P: ☆ Ok. Here you are. (ある場合) ★ I'm sorry. We don't have one. (ない場合) C: Thank you. Bye. (P: Pharmacy C: Customer)</p>	<p>・はじめは、担任が日本語で説明を行った後、ALT と模擬として子ども達に見本を見せる。</p> <p>・理解していない子どもはいないか、全体に確認をとる。</p> <p>・英語でのやり取りを模造紙に書き、黒板に貼っておく。</p>

Let's play Game 実際にゲームを行う。	・担任やALTも子ども達に混じりゲームに参加する。	◎体の調子や症状について英語で聞いたり言ったりすることができる。〈慣〉(行動分析・振り返りシート分析) ・全員が英語を活用してゲームを行っているか確認しながら、子ども達に混じって取り組む。
・本時の振り返りをする。 ・挨拶をする。 Good Bye See You	・振り返りシートを活用し、本時の振り返りを行う。 ・ALTが中心となり終わりの挨拶を行う。	・児童の様子等についてよかったところを具体的にあげて確認することで、児童の次時への意欲を高めるようにする。

第2節 学習指導案②「英語の読み聞かせをきこう（中学生との交流学习）」

次に「円滑な接続」という視点から考えていく。小学校と中学校との接続を円滑にするためには、互いにどんなことを学んでいるのか、関わり合う活動を通して学んでいくことが1番よい方法ではないのかを考える。そこで、小学校6年生と中学校1年生との交流を図る。活動内容は、中学1年生が小学6年生に英語の本の読み聞かせを行う活動である。留意点として、聞いている6年生がただ聞くだけの受け身にならないように配慮し、中学1年生の読み聞かせのどのような点に気を付けて聞くのか、中学生が読んでくれる話の内容を日本語で理解する等を指導計画の1時間目に準備時間として設ける。そして、指導計画2時間目の活動をむかえる。

(1) 活動のねらい

・小学校と中学校の子ども達の関わりを通して、外国語学習の円滑な接続を図るための1つのきっかけとなるような活動にしていく。

(2) 単元指導計画（全3時間）

時	目標・活動	留意点
1	・中学生が読み聞かせに来てくれる前の準備をする。 ①中学生が読み聞かせてくれる本を日本語で聞く。(内容理解) ②中学生の読み聞かせの時にどんなところに気を付けて聞くのかを考える。(ALTが英語で本を読み、気を付ける点を意識して聞く練習をする。) ③感想の伝え方を練習する。(ALTから感想の伝え方を学び、実際に使って感想を伝える練習をする。)	・教室の中に意図的に読み聞かせに活用する本(日本語)ブースを作成しておく。 ・どんな内容だったのか想起させる。 ・聞くとときに話し方や発音を意識して聞くように指示する。 ・聞くとときの態度にも気を付けさせる。 ・簡易的な発表の場を設け、感想の発表の仕方を練習させる。
2 3	・中学生の自己紹介(グループごとに) ・5つのグループに分かれ、5つのお話の読み聞かせを聞く。 ・感想を英語で伝える。 ・活動の振り返りをする。	・英語と日本語でしてもらう。 ・1つのグループ終了時にはメモを取らせる時間をとる。 ・止まったり、わからなくなったりした時は担任が補助に入る。 ・通常の授業で行っているものと同様

(3) 本時の指導 (2・3/3時間)

過程	学習活動	留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をする。 ・全体で学習の見通しを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもの挨拶を行う。(挨拶・自分の調子・天気・日にち・曜日・前時で学んだもの等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業が始まるというけじめをつけさせる。
学習課題：中学生の英語の読み聞かせを聞く。		
<ul style="list-style-type: none"> ・中学生の読み聞かせを聞き、話し方や発音の仕方を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生の読み聞かせを聞く。読み聞かせに活用する教材 ○スミミー ○忘れられないおくりもの ○アレクサンダとぜんまいねずみ ○ふたりはともだち (がまくんとかえるくん) ○ずっとずっとだいすきだよ 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導をしながら困っている班がないか確認する。 ・1つの話が終わったところで、時間をとり感想をメモをとらせる。
<ul style="list-style-type: none"> ・前時で学習したものを活用し、感想を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生に感想を伝えよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板に前時で学習したものを掲示しておく。

第3節 実践にあたっての課題

3つのキーワードをかかげ、二つの指導案を作成した。その中でも、「円滑な接続」を考えた時の指導案作成が1番難しく感じた。子ども達の意欲を引き出すためには、「楽しい実践」や「身近な英語」を授業に取り入れていくことが大切である。しかし、「楽しい・面白い」だけの実践では次の段階へと進んでいくことは困難であり、外国語学習は小学校だけで「話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと」すべての領域を学びきることはできない。小・中・高と長いスパンをかけて、すべての領域をバランスよく学んでいく。

そこで課題となるのは、小学校の外国語活動から中学校の英語への円滑な接続の部分である。小学校から中学校にあがると、学習内容もより深く学んでいくようになる。学習スタイルも小学校では活動型なものが多いが、中学校になると講義型のもが多くなり、大きく変化する。そのような学び方の変化に対して、子ども達がうまく対応していけるように外国語活動を実施していくことが必要である。小学校教員は中学校への円滑な接続を考え、中学校教員は小学校外国語活動でどの程度の英語力を身に付けてきたのか、英語の学習が始まる前段階として生徒の実態把握をするが必要なのではないのかと感じた。円滑な接続を実現させるためには、小学校教員と中学校教員との連携が必要不可欠なものであると考える。

第4章 これからの小学校外国語活動について

第1節 中学校との円滑な接続のために小学校段階に必要な学習や実践とは

小学校段階での外国語活動は、「聞くこと」「話すこと」に重点をおき、積極的なコミュニケーション能力の育成を通して、体験的に理解を深めていくことが小学校学習指導要領外国語活動の目標としてあげられている。その目標を達成しなければ、中学校に進んでいったとき、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」の4つの領域をバランスよく学び進めていくこ

とは困難である。外国語学習の学びを深め、外国語学習全体を発展させていくためには、小学校段階での外国語活動の目標を達成することが重要なのである。これからの社会を担っていく子ども達にとって英語というものは、自分自身の活動の場を大きく広げていくことができるのである。そう考えると、小学校から英語に触れ、学んでいくことで、時間をかけてじっくりと英語を学習していくことができ、頭や耳・口もだんだんと英語に慣れていく。そして、日本という国の未来を担う、今の子ども達が様々な国との架け橋となり、国際交流を発展させていくことができることも十分考えられる。小学校から英語に触れることで得られるメリットを考えていくと、より充実した外国語活動の実施が必要不可欠である。そして、中学校・高校と進んでいく中で、しっかりと学びを構築していくことができるような土台づくりとして、小学校外国語活動の指導にあたっていきたい。

まずは、小学校段階においては、英語を学習するというより英語を耳にしたり、口にしたりすることで英語に興味・関心をもたせ、慣れることが大切である。「外国語活動は楽しい・面白い」と子ども達に感じさせるような授業が、英語に慣れ親しむはじめの一步となる。そのために小学校教員は、小学校外国語活動を通して「めざす児童像」「付けさせたい力」は何なのかをきちんと明確にし、指導にあたっていく必要がある。そうすることで、目的をもって子ども達の指導にあたることができる。

そして、次期学習指導要領において教科となる高学年においては、他教科と関連させながら取り組ませていくことが可能である。例えば、「行きたい国について話そう」という単元時に、社会科で学んだ世界の国々の名前や知識を活用し、今度は英語を使って相手に伝えることができるようにさせていく。社会科だけでなく、他教科でも外国語活動で取り扱う単元によって他教科の既習事項を活用し、関連させながら取り組ませていくことができる。そうすることで、他教科で学んだことを活かしながら英語を学んでいくことができる。

また、外国語活動の学習スタイルとして、1つの学級だけで取り組むのではなく、協同英語活動といった取り組み方もある。協同英語活動とは、異学年で外国語活動を行っていくものである。そのように異学年との交流を活用していくことで、子ども達は楽しみながら取り組んでいくことができる。また、学級担任においても他の学年ではどのように外国語活動に取り組んでいるのかという点を観察することができる。しかし、英語を学ばせるのは小学校だけではないので、小学校から中学校へ・中学校から高校へあがる部分での接続はとても重要な点であると受け止める。特に、小学校から中学校への接続の部分は、学習スタイルが大きく変化するため子ども達が英語から離れていかないように小学校と中学校との連携が大切になる。

小学校と中学校の接続の部分においては、教師間はもちろんであるが、子ども達同士での交流がもっとあってもよいのではないのかと考える。例えば、中学生が小学生の子ども達に英語の劇や読み聞かせ等の活動を取り入れる。そのような活動を通して、小学生が「あんな風に英語を話せるようになりたい」「中学校に行くと、英語をあんな風に勉強するんだ」等これからの期待や英語の学習を頑張ろうと思う意欲を持たせるきっかけの1つにもなる。

第2節 小学校教員としてこれからの外国語活動の取り組みとは

小学校の楽しく体験的な外国語活動を通して、「子ども達にとって英語をどれだけ身近に感じさせることができるのか」が今後の取り組みの中での課題の1つとなっていくであろう。「身近」というものは日常の中に自然とあるものであり、それらを自然と自分たちの生活の中で活用していくことができるものであると考える。それが、小学校外国語活動の取り組みに必要なキーワードの1つとして考えられる「身近に感じることができる」外国語活動である。ほとんどの子ども達にとって、日常生活の中で英語を話したり、意識をして聞いたりということはないに等しいのが現状である。このように非日常的な言語である英語に対して、身近さを求めるとなると時間をかけて少しずつ「英語」というものに近づき、知っていくこと＝学んでいくことが大切である。

小学校段階から、「楽しい」「面白い」と感じる外国語活動を通して英語に慣れ、親しみを感じさせていくことで、中学校・高校・大学と進んでいったときに、外国語学習が少しずつ子ども達にとって身近なものへと変化していくだろう。そして、外国語学習のレベルも発展させていくことにもつながっていく。だんだんと英語に対して興味・関心が高まっていき、「話せるようになりたい」「聞き取れるようになりたい」という気持ちが自然とうまれてくる。そういった高まる気持ちを活かし、土台となる部分をつくりあげていく。その上に外国語学習を構築していくことができれば、発達段階が上がっていくにつれて、英語に対して抵抗を感じるものが少なくなっていくだろう。そのように考えると、生涯にわたって英語を学んでいく動機付けにもなるといっても過言ではないほど、英語に触れる初期段階である小学校の外国語活動で子ども達が学んだことは、とても重要な役割があるということが出来る。これからの社会において、急速に進むグローバル化の中で生きていく子ども達は、英語を話す機会が増え、そのため英語を活用する人も増えていくことが考えられる。2020年には、東京開催のオリンピック・パラリンピックの開催も決定しており、さらに英語に触れたり、活用したりという機会が一気に増加するだろう。そのように、英語を身近に感じることができる機会が、今よりも急速に増加していく。そういった国際的な発展を遂げていく中で、子ども達自身が自然と英語を活用していき積極的に英語でコミュニケーションを図れるようになるようにしていきたい。小学校の外国語学習においては、「楽しい」「面白い」という英語に対する興味・関心を引き出し、高め、積極的なコミュニケーション能力を育成していきたい。そして、中学校との円滑な接続を考えながら、子ども達が小学校段階でできることを通して、身に付けられる英語力を身に付けさせていく。

おわりに

本研究を通じて、小学校外国語活動から中学校英語への円滑な接続を図るためには、小学校では「楽しい」「面白い」と英語に関心・意欲をもたせられるような活動を取り入れていくことが大切であることを改めて認識した。現在の教育現場においては、ALTやICT機器など、外国語活動に取り組んでいく教育環境が徐々に整っていったこともわかった。しかし、様々

な新しい教材や教具が出てくる中で、小学校教員はきちんとした目的をもち、教材・教具の選択や指導にあたっていく必要がある。第2章で取り上げた文部科学省のアンケート調査結果において、「英語が好き」と思っている子ども達が多いこともわかった。その子ども達が思っている「英語が好き」という気持ちを大切に、また、その気持ちを外国語学習への意欲と変えていきたい。

次期学習指導要領では、小学校高学年から外国語活動が教科「英語」となる。そうなると、今よりも一層小学校教員に求められる英語の語学力は高まるであろう。年々増加傾向にあるALTの活用状況と並行して、教員自身も英語でALTと積極的なコミュニケーションを図っていくことが、外国語活動の充実につながっていくと考える。

以上のような本研究で得られたことを活かすために、小学校教員になってから次のようなことに取り組んでいきたい。

まず、子ども達が「英語が楽しい・面白い」と感じるような授業実践力を身に付けることである。その際には、ALTとの連携も大切になってくる。小学校の外国語活動では、「体験的」という言葉がキーワードになっており、体を動かしたり・歌を歌ったり・ゲームをしたりと、体全体を使って取り組んでいく活動が主とされている。そういった活動から英語という言葉を学ばせていきたい。

次に、子ども達にとって英語が身近に感じるような環境にしていくことである。その手段の1つとして、英語で書いた月名や曜日、天気等のカードを掲示したりすることである。そうすることで、子ども達は自然と毎日英語を目にしたり、耳にしたりするようになっていき、英語という言葉が身近に感じるようになっていくきっかけとなっていくと考える。

最後に、異学年と外国語学習に取り組んだりする協同学習である。この研究を通して、そのような学習スタイルがあることを知った。これは、小学校と中学校との「円滑な接続」という観点からも活用することができる。第3章において、学習指導要領②で作成したように、交流の中で外国語学習に取り組んでいくことで、お互いに学び合いながら外国語学習をさらに深めていくことができる。

これらのことを取り入れて、中学校英語へ円滑につなげられるように小学校外国語活動及び新教科「英語」では、「英語が楽しい・面白い」と子ども達が感じるような活動に取り組んでいきたい。そして、さらに外国語活動が子ども達にとって充実したものになるように、研究を続けていきたい。

注・引用文献

- (1) 樋口忠彦 / 加賀田哲也 / 泉恵美子 / 衣笠知子 (2013) 『小学校英語教育入門』(研究社) p.12
- (2) 同注 (1) pp.2-4
- (3) 同注 (1) p.4
- (4) 同注 (1) p.10
- (5) 同注 (1) p.6

- (6) 同注 (1) p.8
- (7) 文部科学省『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』(2008) p.124
- (8) 文部科学省ホームページ
 ○平成26年度小学校外国語活動実施調査結果 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf [2015.11.17 最終閲覧]
 ○教育課程の編集・実施状況調査(小・中の関連について) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2014/03/26/1342497_02_1.pdf [2015.11.17 最終閲覧]
 ○小学校における先進的な英語教育に関する調査 http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4475/00164155/H25_senshintekieigo_tyousayoukou.pdf [2015.11.17 最終閲覧]
- (9) 同注 (1) p.21
- (10) 同上
- (11) 国立教育政策研究所「小学校外国語活動における評価方法等の工夫のための参考資料」http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/11_sho_gaikatu.pdf [2015.11.11 最終閲覧]

参考文献

- Annold Lobel (1970) *Frogn and Toad Are Friends*. Harper Trophy
- Hans Wilhelm (1988) *I'll Always Love You*. DRAGONFLY BOOKS
- 恵泉英語教育研究会 (2014) 『成功する小学校英語シリーズ 外国語活動で使える! 読み聞かせ絵本 & 活動アイデア』(明治図書出版)
- Leo Lionni (1974) *Alexander and the wind-Up Mouse*. DRAGONFLY BOOKS
- Leo Lonni (1963) *Swimmy*. DRAGONFLY BOOKS
- Susan Varley (1984) *BADGER'S PARTING GIFTS*. HARPER
- 吉澤寿一 (2008) 『小学校学級担任が進める子どもが楽しむ英語活動』(日本標準)